

PROGRAM

- ベートーヴェン 「エロイカ」の主題による15の変奏曲とフーガ 変ホ長調
 ベートーヴェン ピアノソナタ 第21番 ハ長調 作品53 「ワルトシュタイン」
 ムソルグ斯基 組曲「展覧会の絵」

四季のコンサート

1994年11月5日(土) 6:45PM
浜松市民会館ホール
主催：浜松音楽友の会



オクサン・ヤブロンスカヤピアノリサイタル

10周年達成記念

共催：浜松市教育委員会

「エロイカ」の主題による15の変奏曲とフーガ 変ホ長調 作品35

ベートーヴェン

この変奏曲は、ベートーヴェンが1800年から1801年にかけて作曲したバレエ曲「プロメテウスの創造物」の終曲から引用した主題に基づいて、1802年に書かれている。したがって、この作品の本来の名は「プロメテウスからの主題による変奏曲」であったのだが、ベートーヴェンが同じ主題を交響曲第3番「エロイカ」の終楽章にも用い、こちらの方が有名になったことから「エロイカ」変奏曲の名で親しまれるようになった。ヘレン版の楽譜では、タイトルは「15 VARIAZIONEN」(MITFUGE) [15の変奏曲(フーガつき)] となっている。

曲の冒頭で提示されるのは、主題のバスの旋律である。ベートーヴェンはまず、旋律的な主題なしに、いわば和声の骨格をもとに、2声、3声、4声のカノンを施し、この部分は全体の導入部となる。そのあとによく主題が奏され、比較的短い14の変奏、そして長大な第15変奏が続く。第7変奏は「オクターヴのカノン」であるが、このあたりにもバッハの「ゴールデンベルク変奏曲」を思い起させるものがある。第15変奏では、装飾音がとても美しい。アレグロ・コン・ブリオのフィナーレ「Alla Fuga フーガのように」は、冒頭と同様に低音旋律に基づく自由なフーガである。

ひとつの「閉じられた」旋律的主題に基づいた従来の変奏曲に対し、作品35は全く新しい変奏曲のモデルを示している。この作品においては、「主題」とされる「エロイカ」の旋律は、従来の意味での変奏の主題ではなく、この主題の旋律ならびに和声の枠組み、低音主題、旋律の骨格等、すべてが展開の材料となっている。

ピアノ・ソナタ 第21番 ハ長調 作品53 「ワルトシュタイン」

ベートーヴェン

「ワルトシュタイン」の名称で知られるこのソナタは1804年に完成されたもので、「月光」(作品27-2, 1801年)や「熱情」(作品57, 1805年)などと並び、ベートーヴェンの中期を代表するピアノソナタである。彼にとっての最大のパトロンであったワルトシュタイン伯爵に献呈されたため、この名がついた。

卓越したピアニストでもあったベートーヴェンにとって、ピアノという楽器は靈感のみならぬものでもあった。当時のピアノは主にウィーン式とイギリス式の2種類に大別できるが、モーツアルトの好んだウィーン式は、軽いタッチと反応の良いアクションを特徴とし、イギリス式は、力強い大きな音が出来るところで知られていた。パリの楽器製作者セバスチャン・エラールは、鍵盤の跳ね返りが良くなるレペティションアクションを考案し、それによってイギリス式のメカニックを改良し、音域も5度拡大したものを製作した。エラールは、1803年にこの楽器をベートーヴェンに献呈しているが、「ワルトシュタイン」の印象的な連打のメッセージや、音域を最大限に使って大音響を引き出す「情熱」などは、このピアノなしには生まれなかつたであろう。

さて、2楽章からなるこの作品は、来年はアンダンテの緩徐楽章をはさんだ3楽章構成であった。この楽章は、「このソナタは長すぎる」という、ある友人の示唆にしたがって削除され、新たに28小節からなる「イントロドゥツィオーネ」が第2楽章冒頭に挿入された。(削除されたアンダンテは、独立した曲【WoO.57】となって出版されている。

第1楽章はアレグロ・コン・ブリオ。8分楽譜の連打に乗って、軽快な第1主題が提示される。第2主題はコラール風で、第1主題と対照をなす。第2楽章のはじまりは、アーディショ・モルトの「イントロドゥツィオーネ」。短いながらも3部形式をなし、緩徐楽章としての役割を果たし、アッカで「ロンド」に続く。ここではオクターヴやトリル、重厚な和音が駆使され、音楽はさまざまな相を呈する。ランドスケープのような第1楽章に、イントロドゥツィオーネのより人間的な声が対比されるが、ロンドではそれらが統合され、豊かさを増していく。長大なトリルから決然とした終結部に入り、堂々と曲を閉じる。

組曲『展覧会の絵』

ムソルグスキー

絵画や彫刻などから靈感を得た音楽作品としては、リストの『巡礼の年』から「婚礼」(ラファエロ)、「物思に沈む人」(ミケランジェロ)、ラフマニノフの交響詩『死の島』(ベックリン)など、いくつもの例を挙げることができるが、ムソルグスキーの組曲『展覧会の絵』は、その中でも非常にオリジナルな作品である。

ムソルグスキーの作品は、絵画のタイトルを標題とすることによって、純粹器楽の作品を構成するにあたっての形式的な制約から逃れると同時に、異なる性格の小品を集め、ひとつの大きな作品としてまとめる成功している。ちょうど、本来は独立した個々の作品が、展覧会場においてひとつの空間に並置されることによって互いの意義を導き出すように、この組曲においても、寓話的、歴史的、宗教的等、さまざまなイメージを表現する個々の作品が、有機的に関連づけられている。この作品のイメージの源泉となったと言われる画家ガルトマンの遺作展における絵画については、所在の明らかでないものもあることは既に知られるところだが、いずれにしても、ムソルグスキーはこの作品において、ガルトマンの絵を標題とした性格小品集を書いたのだと考えるのが妥当であろう。

この作品は、19世紀ピアノ音楽史の脈絡においては、シューマンの『謝肉祭』などの小品集の系列に属するものであり、また、バラキレフの『イスラメイ(東洋風幻想曲)』と並ぶ19世紀ロシアの重要なピアノ作品となっている。ピアニストとしても優れたムソルグスキーであったが、彼の生前に公にこの作品が演奏された記録はない。ムソルグスキーの他の多くの作品と同様に、この作品もまた、19世紀ロシアにおける最も重要な文化人のひとりであり、この作品が献呈された人物でもあるウラジーミル・スタークフが『展覧会の絵』の存在を世に知らしめた。

全体は、5つのプロムナードをはさんで、全10曲が次のように構成されている。

プロムナード

第1曲「ゲノームス」

プロムナード

第2曲「古城」

プロムナード

第3曲「テュイルリーの庭」

第4曲「ヴィドロ」

プロムナード

第5曲「殻から出きらない雌のおどり」

第6曲「サミュエル・ゴールデンベルクとシュミュイレ」

プロムナード

第7曲「リモージュの市場」

第8曲「カタコンブ」

第9曲「鶴の足の上の小屋。バーバ・ヤガー」

第10曲「キエフの大門」